

シノギは凌ぎと書く。

(5号 75年4月)

辞書をひくと「のりこえる」「きりぬける」「たえしのぶ」「がまんする」など、意味が並べてあるが、釜のシノギにぴったりなのはどれだろう。

私には「きりぬける」のように思えるのだが、「たえしのぶ」という角度も、たしかにあって、その点では字としてはまちがいであってもシノギは忍ぎ、と書いてみたい気もする。

そのほか、シノギ、シノグには、ほかよりすぐれているという意味もあるけれど、これは釜には関係ない。

さて今回のシノギ特集は、もっと大きく深くやる予定のところ、御存知の千成ホテルの火事も特集したので小さく浅くでお茶をにごしてしまった。おわびします。その代り千成ホテル特集はマスコミ以上の大調査です。

シノギかた全書

ひとつも知らない人が

シアワセナノダというページ

釜ヶ崎でシノグとはどういうことか。これがまず問題だ。

(1) よそからきてシノイでいた連中

いまは釜の不況が知れわたっているから見ないけれど、ふつうのサラリーマンや学生が、釜へシノギに来ていたこともある。景気がよくなれば、そういうテアイはまた現れるだろう。

つまり、月賦の買物をしすぎたり、マイホーム資金を早くためたかったり、デート代がほしかったり、旅行のカネが必要とかいう連中が、会社を有給休暇にしないと釜でかせいでたのは、シノギの一種なのだ。

このテアイは万博工事ごろから、こんどの不況になるまでずいぶんいた。

さすがに地下足袋をはくのはいやがって、白いズックの靴なんかはいていたのが、このテアイには多い。もちろん、手伝い、雑役で行っても仕事は半人前以下が多かった。

このテアイに、現場でワリを食ったおぼえのある者は、たくさんいるだろう。

(2) タカリ、タタキ、女

〈シノギ屋をたたきつぷせ〉なんてポスターも出ている、あのシノギ屋のことがもう一つある。

仕事はしないで（やる気もなくして）、顔見知りにはタカルことから路上強盗まで、あらゆることをやって飲んだくれてるシノギ屋は、これまたずいぶんいる。きれいな恰好してるのから、たき火のスズにまみれたアオカン専門まで。女のシノギ屋もちろはいるのは知ってるの通りで、もちろん若い女はいないけれど、それでも女だというだけで、どこたたき火でもジャマにはされないし、ショウチュウのまわしのみの順番も早い。釜ではシノギ屋までがフェミニスト（女性尊重主義者）だ。

(3) マトモなほうのシノギ

だがしかし、今回の特集へこの冬どうしてシノイだかへは、そんなシノギかたについての話ではない（少しは含むが）。

ここというシノギ特集はつまり、仕事のぼったり止まったこの冬を、どうやってすごしたかについ

て、もうちょっとマトモな水準で経験を出し合う場所のつもりなのだ。

たとえば、れっきとしたトビ職が、仕事がきれて土方をしてシノイだ話や、段ボールを拾い集めて売った話や、三食を二食にしたことや、ドヤだけは確保してノーチャブで寝たことや、悪い飯場でまがマンしてたことや、そんな経験を集めたいと思って考えた特集だ。

(4) その種類あれこれ

雑誌に入れたハガキはまだあつまってきていない。だから、これは私が自分で経験したり、見たりしたシノギのことだが、大体次のような種類と方法が、釜のアンコがやれるシノギにはあると思う。ハガキがあつまってくれば、もっといろいろ出てくるだろうが、まあ書いてみよう。私がこれを書いてるのは三月十六日（日曜）の午後である。

思いつくまま並べる。服装かまわず、リレキ書なし（もしくはウソ八百で）、すぐにやれる仕事だ。

- ・めし屋の雑役、洗い場（経験あり）
- ・新聞配達（やってた男を知ってる）
- ・屋台のラーメン屋（右に同じ）
- ・バタヤ（この冬、釜にたくさんいた）
- ・トラック助手（経験あり）

- ・サンドイッチマン(やっていた男を知ってる)
- ・パチンコ店員(右に同じ)
- ・靴みがき(やっていた男を知ってる)
- ・ガードマン(やっていた男を知ってる、制服は貸してくれる)
- ・露天商(ガラクタ売り、やっていた男を知ってる)
- ・市場の夜警(やっていた男を知ってる)
- ・地下街の掃除番(夜の仕事、やっていた男を知ってる)
- ・銭湯のカマ場(やっていた男を知ってる)
- ・つれこみホテルの掃除番(やっていた男を知ってる)
- ・田舎まわり(これはオモライに近い、知ってる男がやっていた)
- ・ドヤの従業員(やっていた男を知ってる)
- ・オカマになる(服装のモンダイはある)
- ・その逆でオカマに食わしてもらう(知ってる男がなった)
- ・病院へ入る(アンコしてれば大ていどこか悪いから入れる)
- ・血を売る(ひどく腹をすかせてはダメ)

(5) さらに特殊に――

ざっとこんなところが、私の知ってるシノギだが、もっと特殊なものに「小鳥屋」というのもあった。これは能勢や高槻などの山の中へ入ってつかまえてきた小鳥を、町の鳥屋に売るのが。K組の常連だった若いやつがやっていた。ただしこの冬の話ではない。

また、獅子舞いをやっていた男も知っている。この男はM組飯場にいた。

もう少し落ちてくると、ノミ屋の手下、四五一バクチの見張り役なんてのもある。

・パチンコでかせぐこと。これは大分やっているとと思う。プロとまではいなくても、うまく切り上げていれば、かつかつに食って寝るぐらいにはなる。もちろん、上手な奴、運のいい奴は飲むこともできる。

・競の字のつくこと一切。競馬、競輪、競艇、各自のトクイなのでシノギがつけられる時もある。本命狙い、穴専門とやり方はいろいろだし、多分読者の方がよく知ってる。

こうみてくれば、パチンコの景品がスムーズに大いばりで金と代えられる大阪は、東京よりずっとマシなことがわかる。

それと同様、三角公園でさかんなギャンブルのノミヤだって、悪いばかりではないので、あれがあるから電車チン使わずに大穴がとれたりするのだ。

むろん、ノミヤを全面的にイイとはいわない。が、シャクシジョウギな正義派の方が、もっと「労

務者」にとってジャマくさいこともある、というハナシ。

さらに・家へ泣きついてカネを送ってもらうとか、定職についている兄弟を頼って借りるとか、親戚をまわるとかもある。これはみんな口に出していいわないが、それでシノギをつけてる者は意外といるのだ。

しかし、いうなればこんな方法は金ヶ崎人としてはまだケツが青いので、一人前の釜のニンゲンはやらない。というよりも、やるにもやる相手がいないのが金ニンゲンなのだ。

(て)

経験者は語る!!

Ⅱアンケートはがきと編集委員の交流Ⅱ

特集「この冬どうしてシノイだか」のアンケートハガキは、たくさん読者からいろんな回答が書きこまれて返ってきた。

その紹介をやってみる。

まず、「ニューギンザ」に泊っているS・Kさんのハガキから。

(S・Kさんの文章のまま書きうつす)

——この冬は寒かったし、十一月から十二月にかけて仕事もなく、くるしかったで。わしら三日に一回ぐらいしか仕事にいかれなんだ。

車がセンターにこんけ、きてものせやらん顔^{すけ}だけで。僕達がいくと顔をじっとみて、おまえあかんとゆうてドアをしめてしまう。あたまにくるで。

わしもなんど西成を出ろかと思ったが、やっぱりだめやった。土方して三年たったが、もう足あらえんけのう。おれはけっしんしたんや、西成にいる事を。そして仕事に行く事にした。でも去年とおんなじ事やってたらあかんけ、今年はもう少し奉心(方針のことだろう)をかえよかと思っている。

昨年^しの十二月の時、つれをつれて新世界にいった。よるおそくなつてはらがへつてきて、金がないしそこへすわつてじっとしていると、前に赤ちやうちんの飲みやがあつた。その客が、おまえらはへつてんかとうて、オデン二皿もつてきた。おれものどから手がでるほどほしかった。つれの一人もはらへつたいいながらがまんした。

おれ達はこじきとちがうやとゆうと、その客が、そのつもりやなかったすまんとゆうた。二人でオデンたべたその時はなみだがでるほどうれしかった。ことしはいい事があるようがんばっていくつもりや。

S・Kさんのハガキは、小さな字で十九行もびっしり書いてある。もらって食べたそのオデン(関東煮)のうまさは、ハガキを書きうつしてるこっちにもよくわかる。

姫路の半ダコ飯場から大勢でトンコして、單車で追っかけられたりしてバラバラになって歩いたと

き、道ばたに落ちてたピーナッツを拾って食ったおぼえがおれにもある。夜つゆにぬれたピーナッツはぐやぐやだった、それでもずいぶんうまかった。

次は「南極」にいるS・Sさんから。やはりハガキをそのまま書きうつす。

——冷い不景気風は、私にはおくれて二月中旬から吹き始めました。少しばかりですが平常貯金らしきものが有ったので何とかしのぎましたが、ソロソロ働き出したいと思っています。

老いた母が常日頃ヤカマシイほど申ししていた貯金が、この釜ヶ崎台風から守ってくれた事を感謝しています。

S・Sさんはカタイヒトのようだ。貯金はいりん銀行だったろうか。あいりん＝愛隣というヘンテコな名前は、役所とマスコミが使ってるだけだけど、そのなかで一番マシなのはあいりん銀行だ。この名前が一つだけアノコ社会に根をおろしている。まあ、それについてはいずれこの「労務者渡世」がひと言もふた言も書くつもりだよ。

次にHさんのたよりを紹介する。

Hさんがハガキにびっしり書いてくれたなかには、どうシノイだかとは別の大切な問題も出されている。それについてもみんな考えてみたい。

——小生釜ヶ崎居住して十年余、東北の漁師町八戸^{はちのへ}から来た当時は景気よく、はたらく気力さえあれば最低生活する賃金は得られたが、無理がたたって四十の声を聞くにつれ体が思うように行かなくなって、去年の暮れまで痔がひどくて医療センターに入っていた。しかし朝鮮人呼ばわりのいやがらせでやむを得ず路傍に身を投じたのが暮れの二十九日でした。

Hさんが書いている医療センターでの「朝鮮人呼ばわりのいやがらせ」の実際は、調べるヒマがなくてわかっていない。だが、暮れも二十九日と押しつまってから、ベッドとめしのある医療センターを出てアオカン生活を始めるというのは普通ではない。また「朝鮮人呼ばわり」というのはもちろんHさん自身に向ってのことだったと思うが、ハガキで見るHさんの姓名は日本的なもので、文章も（こちらで少し省略などしているが）ちゃんとした日本語だ。だからここには、複雑な問題が感じられる。それはHさんひとりのことではない。普通、朝鮮問題というと、インテリふうにかっこよく片付けられているが、釜ヶ崎の場合、とてもそんなことでは足りない。たとえば、人夫出しのオヤジにはたたくさんの朝鮮人がいて、雇う雇われるの関係では、アノコをしている日本人より強い立場を持っている。けれども、民族という角度からは、「なんだあの朝鮮ヤローめ」といった差別の感覚が雇われるアノコの方に、程度の多少は別としていて存在する。それからもうひとつ、人夫出しのオヤジではなくて、同じアノコ労働者のなかにいる朝鮮人に対しても、労働者としての連帯感を持っていないがそれでも尚「やつは朝鮮人だからな」というような、妙なコトバが出てくる感情、あるいは習慣があることは否定できない。Hさんのハガキは、この最後の場合のことのようだ。これはよくよく考えねばならない問題だと思う。これをインテリふうな、かっこいいばかりの口先、ペン先で終らせることはできない。

さて、Hさんはどんな具合にこの冬をすごしたろうか。

——（Hさんのたより、つづき）いっそのことテント村へ厄介になろうかと思ったが、小生の性格からのプライドが許さず、思案のあげくミナミの難波球場近くの古品回収業の小屋をみつけてそこへ

行った。歩きまわって集めたボロをふとん代りに、正月中は難波新地の残飯をあさり乞食より悲しい時をすごしましたが、今後の生き方に少しでもプラスになればと思うのですが……？

Hさんのたよりは「……？」で終わっている。実際の話が、ツルタコウジのいい草のように「右も左もまっくらやみ」のお互いの生活、さきのことは「……？」とするしかないのはたしかだ。Hさんの気持は、同時に釜で生きる多くの者の気持でもある。

それにしてもHさん、春になって痔は少しくなりましたか。おだいじに！

こんどはTさんのたより。これもハガキにびっしりと（横書きで）文字がまっている。Tさんは二十八歳という。

——（Tさんのたより）俺はシケタ冬を京都ですごした。仕事は舗装であたたかだったが、単価は食いぬき四千円で安かった。朝鮮人のおやじはいい人間だった。

偶然だが、ここでも朝鮮人が出てくる。

つまり釜ヶ崎では、ことさら「問題」という必要もないほど、日本人も朝鮮人もいっしょに生きているのだ。いっしょにと書くときよりゴタマゼにと書く方がいいかも知れない。そのゴタマゼからうまれている「日朝モンダイ」や「チョーセン人問題」が、文化人とかいわれてる連中が、頭の中で整理したモンダイとちがうことをもう一度言っておこう。

Tさんのたよりには「俺がうれしかったこと」というのが次に出てくる。

——俺は休日には釜へ帰って仲間と酒を飲んで京都へ帰った。その帰りに、梅田の地下道でテント村のカンパを呼びかけてるのをみてうれしかった。俺は五百円カンパしたよ。

テント村はつぶされたが、いつか必ず俺たちの世の中がくるよ。俺は飯場まわりが多いけれど、いつも釜のことを思い、弱い人間は力をあわせなければと考えてるよ。

Tさんのたよりはここまでだ。

それから、まだたくさんたよりのが、釜にいる読者、前は釜にいていまは外に出た読者、家出した兄を探しに釜へきたことがあるという奥さんなどからきている。でも、千成ホテルの火事特集のため、これ以上のページをとれないので「この冬どうシノイだか」というテーマに沿ったものに限りました。カンベンして下さい。必ずいつか一度（あるいは二度三度と）、読者のたより特集をやって紹介するつもりです。

西成公告第86号 昭和50年1月27日 [最初の文章は同じなので省略する]

1. 本籍住所 不詳
2. 氏 名 自称喜多以下不詳
3. 年齢性別 50歳位, 男
4. 人相特徴 身長156cm, 面長, 頭髪 7cm, 黒の密, ヤセ型
5. 着 衣 濃灰色地に赤と黒の格子柄シャツ, ラクダ色シャツ 2枚, 白メリヤスシャツ 2枚, ねずみ色毛糸シャツ, 国防色作業ズボン, 立縞ステテコ, 紺靴下
6. 遺留金品 22万845円
7. 発見日時 昭和50年1月17日午前10時10分ごろ
8. 発見場所 西成区萩之茶屋1丁目2番20号 宝ホテル3階
9. 死亡日時 昭和50年1月16日午前0時ごろ (推定)
10. 死亡場所 発見場所に同じ
11. 死 因 凍死
12. 処 置 検視の上, 北斎場にて火葬にふす

西成公告第133号 [同様に最初の文章は同じなので省略する]

1. 本 籍 自称 長崎県長崎市阪本町2415番地
2. 住 所 不定
3. 氏 名 自称 松尾忠行
4. 年齢性別 49歳位, 男
5. 遺留金品 なし
6. 発見日時 昭和49年11月25日午前11時20分頃
7. 発見場所 西成区太子1丁目14番2号 簡宿「アポロ」22号室
8. 死亡日時 昭和49年11月25日午前4時頃
9. 死亡場所 西成区太子1丁目14番2号 簡宿「アポロ」22号室
10. 死 因 肺結核
11. 処 置 検視の上津守斎場にて火葬にふす

((《注》着衣のらんはありませんでした。——「渡世」編集委))

西成公告第101号 昭和50年2月20日 大阪市西成区長 田仲義一

行旅死亡人告示

次のとおり行旅死亡人を取扱ったから心当りの方は当区役所内福祉事務所で申出て下さい。

記

1. 本籍住所 不詳
2. 氏 名 不詳
3. 年齢性別 45歳位, 男
4. 人相特徴 身長164cm丸顔, 頭髪3cm, 左前頭部に5cmの脂肪瘤
5. 着 衣 草色丸首シャツ, エビ茶色スポーツシャツ, ラクダ色腹巻, 茶色パンツ, ラクダ色ズボン下, 国防色作業ズボン
6. 遺留金品 なし
7. 発見日時 昭和50年2月10日午前9時40分ごろ
8. 発見場所 西成区萩之茶屋2丁目2番10号先路上
9. 死亡日時 昭和50年2月10日午前6時頃
10. 死亡場所 発見場所に同じ
11. 死 因 慢性虚血性心疾患
12. 処 置 検視の上, 北斎場にて火葬にふす。

こういう掲示が西成区役所の前の掲示板に出される。

これは, この冬シノギきれなかった仲間たちの身よりがないとき(引取り手がないとき)に, 警察からまわされてきた書類をもとに役所がだすものだ。合掌!

哀悼のページ——シノギきれなかった人たちにささげる——

(5号 75年4月)